



## キリスト教史 下巻 増補新版

### 宗教改革から現代まで

◆ A5判・上製・470頁・本体5900円

### フスト・ゴンサレス著／石田学、岩橋常久訳

#### 増補新版に基づく待望の新訳！

「ゴンサレスのキリスト教史」は、2002年・03年に邦訳上下巻が刊行されて以来、わが国で最も信頼できる通史として多くの読者を獲得してきた。キリスト教史上の重要人物の生涯や思想、教会の歩みを、生彩溢れる筆致で、社会全体との関わりの中で記述する。

2010年に刊行された原書下巻の増補新版は、現代史を中心に2つの章が増補された。本書は、その増補新版に基づく待望の邦訳で、旧版より80頁以上増。キリスト教が近代世界の形成の中でたどった激動の歴史を詳述し、変化する社会的文脈の中で信仰のかたちが多元化・多様化する状況を活写する。キリスト教の未来のアイデンティティを考えるために必読の歴史書である。

既刊 **キリスト教史 上巻** 初代教会から宗教改革の夜明けまで

◆ 439頁・5700円



著者 Justo Gonzalez

1937年、キューバ生まれ。キューバの神学校を終えた後イェールで神学を学び、歴史神学の分野で学位を取得。エモリー大学、コロンビア神学校等で教鞭をとり、アトランタにある超教派神学校を最後に、現在は引退生活。スペイン語圏におけるプロテスタント神学の発展と発信を牽引してきた。英語とスペイン語で多くの著書がある。邦訳は他に「キリスト教思想史」「キリスト教神学基本用語集」「これだけは知っておきたいキリスト教史」。

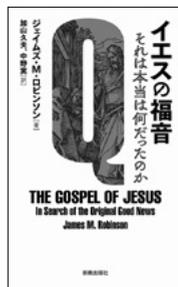
いしだ・まなぶ氏は日本ナザレン教団小山教会牧師、日本ナザレン神学校教授。

いわはし・つねひ氏は日本基督教団隠退教師。

6月25日発売

# イエスの福音 それは本当は何だったのか

6月22日発売



ジェイムズ・M・ロビンソン著／加山久夫、中野実訳

Q資料やトマス福音書など「言葉福音書」を深く読みこみ、イエスが語った「良き知らせ」福音の核心に迫る。本書は、長年斯界を牽引してきた著者の聖書学者としての研究の集大成であり、また一信仰者としての総決算でもある。

◆四六判変型・並製・410頁・本体3500円

# 現代のバベルの塔 反オリンピック・反万博

6月25日発売

新教出版社編集部編

東京オリンピック・大阪万博、さようなら！



東京オリンピック・大阪万博は「一つの言葉」のもとに民を統治する「現代のバベルの塔」だ。本書は、解放の神学、科学技術史、ジェンダー、アクティビズム等の視点による9つのテクストと著者3名のトークにより、その統治から離脱しようとする闘いの書である。オリンピックはいらない、万博はいらない。私たちには本当のことだけあればいいのだから！

寄稿者Ⅱ有住航・いちむらみさこ・酒井隆史・入江公康・塚原東吾・田中東子・坂井めぐみ・井谷聡子・白石嘉治。挿画Ⅱ武盾一郎

◆四六判・並製・200頁・本体2000円

既刊書より  
続けるもの／叛くもの  
統治とキリスト教の異同をめぐる

寄稿者Ⅱ佐々木裕子・堀江有里・要友紀子・白石嘉治・栗原康・五井健太郎、  
セクシュアリティ、アナキー等を手がかりに。

◆四六判・本体2200円

ジャン・カルヴァン著／森川甫訳

## 共観福音書註解 下巻

マタイ・マルコ・ルカの三福音書を対観しながら記された注解書。福音書の「調和」を見出そうとする改革者の情熱。上巻の刊行から36年ぶりの邦訳完結となる。

A5判・予価8500円

ヴァルター・リユテイ著／野崎卓道訳

## 主イエスの言葉と働き 「仮題」

キリストの福音の高さ、深さ、広さ、豊かさを存分に味わえる、ルカ福音書1章から10章に基づく珠玉の講解説教集。

◆四六判・予価3600円

宮平望著

## デイズニー変形譚研究

前著『デイズニーランド研究』の続編に当たる本書では、分析をテーマパークから主要作品に移し、聖書的テーマの変容を丹念に辿ることによって、聖俗の狭間にあるデイズニーの世界観に迫る。

A5判・予価2000円

日本クリスチャン・アカデミー関東活動センター編

## 次世代の教会への提言 神学生交流プログラム講演記録

教派の枠を越えて集う神学生たちの交流の場で語られた10年間の講演。寄稿者：荒井献、小林哲夫、本田哲郎、関田寛雄、杉野榮、青野大潮、森一弘、並木浩一、石田学、神田健次、戒能信生。

A5判・予価4000円

●4月に出了本と5月に出了雑誌

## 逆風に抗して

ドロテー・ゼレ著／三鼓秋子訳

ドロテー・ゼレ 回想録



戦後神学界に常に新鮮な問題提起を行ってきた女性神学者の逆風に負けない不屈の精神と知性、美的なものに開かれた感性が随所にきらめく稀有な人格を、生き生きと伝える自伝の傑作。

◆四六判・本体2900円

## イエスを見つめながら

カンバーランド長老キリスト教会高座教会七〇年史



小さな英文聖書から生まれ育った教会の、迷いと成長の記録。時に迷い時に痛みを負いながらも、キリストを見上げて走り続けてきた70年の軌跡をたどる。同教会編。

◆A5判・本体2000円

## 福音と世界

6月号 ヒップホップの福音

◆税込6600円

寄稿者：山下壮起、二木信、五井健太郎、高島鈴、飯田華子、MCビル風（インタビュ）／栗田隆子、金迅野、好井裕明、土井健司、マニユエル・ヤン、松本あずさ、長谷川修一、辻学、山口政隆、内田樹

●「人類が新型コロナウイルス感染症に打ち勝った証として、完全な形で、東京オリンピック・パラリンピックを開催する」。三月二十四日、安倍首相の発言です。それから二カ月余が経過した現在、ここ日本ではパンデミックの被害の全容も、はたしてそれが収束したのかもわかっていません。たしかなのは、緊急事態宣言を解除し「新しい日常」を呼びかけながら、政府はこのことばを実現するために動きだすだろうということです。南米やアフリカではいままさに感染症が猛威をふるっているなかで、なにが人類か、といった感を抑えられません。新刊『現代のバベルの塔——反オリンピック・反万博』では、こうした事態をめぐる圧巻の論考も収録しました。「これは私のからだではない」で、白石嘉治さんはこう語ります。「表象と記号の『巨大回路』である『技術全体主義システム』がたちあがりつつある。にもかかわらず、いわばパンデミックの崇高のなかで、身体へとむかう思考の徴候もみいだせるのではないか？」表象できないほどに圧倒的なものである崇高は、巨大なグローバル資本の運動のみならず、やはり表象や記号を踏みこえて変様する身体をも指し示します。オリンピックにせよパンデミックにせよ、問われているのは崇高です。これ

からも資本の「巨大回路」を繰り返す続けるのか、外界に触発され揺れ動く身体を愛して生きているのか。答えはすでに示されています。「だれも、二人の主人に仕えることはできない」（マタイ六・二四）のですから。（堀）

●先日、中国文学者井波律子さんの訃報に接しました。同氏の専門家としての業績には疎いのですが、新聞で読む氏の書評が大好きで、私にとってはもっぱら書評家の井波さんでした。昨年、三十年にわたる書評を集成した『書物の愉しみ』（岩波書店）が出たのでさっそく購入、後架に常置して毎朝出勤前に一編ずつ読むのが楽しみでした。氏の書評はどれを読んでも勘所を押さえた的確な紹介と、氏自身がその書物から得た愉しさが生き生きと伝わる好エッセイなのですが、この本を読み終えて気づいたのは、長い書評家人生の中で井波さんは一度も批判を書かなかったということです。氏ほどの読書人であれば対象の書物の欠点は直ちに明らかだったはず。割り当てられた本がたまたま欠点のない本ばかりだったのか（可能性ゼロ）、欠点のない本だけ書評したのか（可能性少）、欠点をあえて論じなかったのか（可能性大）。本の読み方をいろいろ考えさせられました。まだ七十六歳、残念でなりません。（小林）

# 福音と世界

2020年  
7

A5判・80頁・定価660円・送料70円  
年間予約購読料（送料共）8760円

特集・「コミュニケーションの現在性」  
アクチュアリテイ

フランス現代思想における信と共——市川崇  
資本のコミュニケーション  
あるいは認知資本主義の両義性？——山本泰二  
ウィルス・プリアネットとエゴロジーの政治学  
——人新世・コミュニケーション・芸術——清水知子  
フェミニズム／再生産／コモンズ——シルヴィア・  
フェアリーチの議論によせて——小田原琳  
抵抗なき逃走は連帯をなすか  
——欲望と政治の在処について——小林卓也  
時よ（しよちゆ）止まれ——入江公康

【注目の連載】

- ◆いまを生きていることは 4 ……金 迅 野
- ◆I Say a Little Prayer 開かれる世界 4 ……栗田隆子
- ◆新約釈義 第三メモ書 4 ……辻 学
- ◆くまさんのシネマめぐり 7 ……好井裕明
- ◆教父学入門 11 ……土井健司
- ◆バビロンの路上で 16 ……マヨエル・ヤン
- ◆遺跡が語る聖書の世界 18 ……長谷川修一
- ◆福音書記者たちの饗宴 19 ……松本あずさ
- ◆私はロックがわからない 22 ……山口政隆
- ◆レヴィナスの時間論 63 ……内 田 樹